

氏 名 黒 江 ゆ り 子
 学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
 学 位 記 番 号 人 博 第 93 号
 学位授与の日付 平成 12 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 慢性疾患におけるアドヒアランス Adherence に関する研究

論文調査委員 (主 査)
 教 授 津 田 謹 輔 教 授 家 森 幸 男 教 授 田 口 貞 善

論 文 内 容 の 要 旨

わが国においては、食生活の変化と社会全体のモータリゼーション化によって運動不足がすすみ、成人病の増加、若齢化に拍車がかかり、厚生省は 1996 年に生活習慣病の概念を提唱した。

生活習慣病の代表である糖尿病は、わが国では年々増加している。糖尿病は細小血管症あるいは大血管症などの合併症により患者の生命や生活の質(QOL)に大きな影響を与えている。糖尿病治療において、血糖値を良好な状態に保つことが最も重要であることが証明されている。血糖コントロールのために患者は食事療法、運動療法および薬物療法を日常生活の中で続けることが必要となる。ところが、食あるいは運動は個人の生活習慣と深く関連しており、長期間の継続には多くの困難を伴う。

このようなことから、諸外国においては糖尿病患者の心理社会的特徴に関する研究が 1960 年代から進められ、1980 年代にはアドヒアランス(患者が治療計画に積極的に参加し、決定したセルフケア行動を遂行すること)の概念が提唱され、これを阻害する要因を明確にしようとする試みが行われてきた。しかしながら、わが国においては、糖尿病患者が日常生活の中で直面する具体的な困難、あるいは食事・運動・薬物療法の継続を阻害する要因を解明しようとする試みはほとんどなされていない。医療職者、中でも患者を日常的な側面から支援する役割を担う看護職者による体系的な研究は現在もなお、その一歩を踏み出せていない。

そこで本研究では、(1)糖尿病における患者の心理社会的特徴に関して、食事療法におけるアドヒアランスと心理的障壁を明らかにし、(2)わが国における糖尿病患者のアドヒアランス測定法を開発することを目的とした。

(1)食事療法におけるアドヒアランスと心理的障壁については、以下の3側面からの解明を試みた。第一に、食事療法における糖尿病患者の食逸脱行動(過食と欠食)の発生頻度とその原因について調査し、Marlat GA の逸脱行動再発分類による解析を行った。この調査により、糖尿病患者の約 80% に食逸脱行動が発生し、その多くが過食行動であること、その誘因として食べ物を見るなどの視覚や嗅覚からの外的刺激と自分で許すなどの内的刺激が関わっていること、また否定的感情による過食が女性患者にみられることが明らかになった。第二に、過食と嘔吐をくり返す食行動の異常をもつ糖尿病患者を対象として心理面の看護ケアの中で面接を継続し、どのような心理的要因が食行動の異常に関わっているかを Strauss A による病みの軌跡モデルを用いて解析した。「自分は健康でない」という認識、家族との葛藤、低い自尊感情、頑張りへのこだわりが食行動の異常に関与していることが示唆され、このような症例では心理面からのサポートが治療にかかせないことが明らかになった。そして第三に、肥満傾向にある糖尿病患者にみられる早食いの心理的背景について調査した。BMI による分類にて肥満傾向にある人は、不安なとき、孤食のとき、朝食を抜いたときなどに早食いになりやすいことが示唆された。

(2)諸外国においては、糖尿病患者の心理社会的研究においてアドヒアランスの概念が用いられ、その測定方法に関する研究が行われているが、わが国においてはまだアドヒアランスの測定方法は全く開発されていない。そこで、第一ステップとして、どのような測定方法をわが国で採用することができるかを検討した。1型および2型糖尿病患者のインスリン療法におけるアドヒアランスについて調査し、多項目で構成される質問紙法にて測定することが可能であることを確認した。この調

査では同時に、若年糖尿病患者では「インスリン道具の持ち歩き」の困難さが大きいこと、および年齢やインスリンの使用年数に関わらず「痛みがあるので注射を躊躇する」患者が多いことが示唆された。第二ステップとして、Irvin AA らによる EBAS (アドヒアランスの環境的障碍測定法) に基づき、わが国におけるアドヒアランス障碍測定スケールを作成し、調査を行った。食事療法、運動療法および薬物療法に関して高い信頼性が得られたことより、この測定法の開発をさらに進めることが可能であると考えた。

以上、本研究では糖尿病における患者の心理社会的特徴について、主に食事療法におけるアドヒアランスとその心理的障壁についていくつかの新知見を得た。同時に、わが国における糖尿病患者のアドヒアランス測定法の開発の可能性を示した。慢性疾患の一つである糖尿病は生涯にわたる養生が必要であるからこそ、医療職者、特に日常生活という側面を踏まえて健康を支援する看護職者は食事・運動・薬物療法のどこに患者が困難を抱えているかを明らかにし、適切なサポートを提供する役割を担っている。そのためにはアドヒアランスの測定方法の開発が不可欠であり、今回開発したアドヒアランス測定法の研究をさらに進めることによって、一層客観的に測定することが可能になると考える。

論文審査の結果の要旨

生活習慣病の代表である糖尿病は、わが国において年々増加を続けている。糖尿病は細小血管症や大血管症などの合併症により患者の生命や生活の質 (QOL) に大きな影響を与えている。近年の大規模研究により糖尿病において厳格な血糖コントロールが合併症の発症を低減させることが明らかとなり血糖コントロールの重要性が改めて注目されている。血糖コントロールのために患者は食事療法、運動療法および薬物療法を続ける必要がある。しかし、長期継続は容易ではなく、網膜症による失明や腎症の悪化による人工透析に至る例が少なくない。

このようなことから、諸外国においては糖尿病患者の心理社会的特徴に関する研究が行われ、アドヒアランス (患者が治療計画に積極的に参加し、決定したセルフケア行動を遂行すること) という概念が生まれ、それを阻害する要因が研究されつつある。しかしながら、わが国においては糖尿病患者が直面する困難を系統的に解明しようとする試みはなされていない。なかでも患者を日常的側面から支援する役割を担う看護職者による継続的な研究は行われていない。

本研究において申請者は (1) 糖尿病患者の食事療法におけるアドヒアランスと心理的障壁を明らかにし、(2) わが国における糖尿病患者のアドヒアランス測定法の開発を行った。

すなわち、申請者はまず食事療法におけるアドヒアランスと心理的障壁について 3 側面からの解明を試みた。第一に糖尿病患者の食逸脱行動の発生頻度とその原因を調査し、Marlat GA の逸脱行動再発分類により解析した。なかでも申請者は過食行動に注目し、わが国の糖尿病患者の過食行動は外的および内的刺激による誘惑が大きく関与していることを明らかにした (日本精神保健看護学会誌, 6 巻 1 号, p 42-49, 1997)。この結果は、糖尿病患者の過食行動を減少させる医療的介入の今後の展開において貢献するものである。第二に、申請者は過食と嘔吐を呈している糖尿病患者の面接を継続し、食逸脱行動に関わる心理的要因について Strauss A による病みの軌跡モデルを用いて解析し、家族との葛藤、頑張りへのこだわり (日本精神保健看護学会誌, 7 巻 1 号, p 22-30, 1998)、低い自尊感情 (日本看護診断学会誌, 4 巻 1 号, p 86-96, 1999) 等が食逸脱行動に関与していることを明確にした。米国では若年糖尿病患者の中に神経性食思不振症や神経性過食症などの食行動異常が多いことが知られている。わが国ではまだまとまった調査が行われていないので正確な頻度が不明である。申請者は若年糖尿病患者の食行動異常に注目し、わが国にもその症例があることを実証し、治療法の一例を示した。この結果はわが国における調査の今後の展開に貢献するものである。申請者は第三に、肥満傾向の糖尿病患者に見られる早食いの心理的背景について調査し、早食いに至る心理状態および食事摂取状況を限定した。この結果は、食後の血糖上昇を引き起こす可能性のある早食いを予防する今後の展開において貢献するものである (糖尿病患者の QOL, 医学書院, in press)。

次に申請者は特に糖尿病患者が血糖コントロールに積極的に参加することを意味するアドヒアランスの重要性に注目し、わが国の糖尿病患者のアドヒアランスを客観的に測定する方法の開発に目標をおいた。わが国においてはアドヒアランス測定法の開発が成功していないため、血糖コントロールに必要な食事・運動・薬物療法のどこに患者が困難を抱えているかを測定する方法がない。そこで申請者は第一段階として、わが国で採用できる測定法を検討するため、インスリン療法におけるアドヒアランスについて調査し、質問紙法による測定が可能であることを確認した (大阪市立大学看護学紀要, 4 巻 1 号, p 29-43, 1997)。さらに申請者は第二段階として、Irvin AA らによる EBAS (Environmental barriers of adherence

scale) に基づき、アドヒアランス障害測定法を作成し、食事・運動・薬物療法の項目で高い信頼性を得たことにより、この方法が糖尿病患者のアドヒアランス障害測定を可能にすることを実証し、糖尿病に関わる看護分野において新たな進歩を、担うことができた。

本研究では糖尿病患者の食逸脱行動の発生状況と原因を明らかにするとともに、わが国における患者のアドヒアランス測定法の開発の可能性を明らかにすることに成功した。慢性疾患である糖尿病においては食事・運動・薬物療法のどこに患者が困難を抱えているかを明らかにし、適切な支援を提供することは良好な血糖コントロールの維持の可能性を高める。そのためにはアドヒアランスの客観的測定法の開発が急務である。申請者が今回開発した測定法は、看護分野のみならず糖尿病に関わる医療全体にケア方法の改善に優れたデータを提供すると考えられる。

本研究は、人間と環境の問題を総合的に考察するという人間・環境学専攻、自然・人間共生基礎論講座の目的に沿ったものである。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成12年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。